

「見」字再考

松尾善弘

(一九八四年九月十五日 受理)

一 「百里見秋毫」の解釈について

秋の末つかた、鷹狩に随行して作った「観放白鷹(二首)」と題する李白の詩その一は次のようである。

八月辺風高　八月　辺風高し
胡鷹白錦毛　胡鷹　白錦毛
孤飛一片雪　孤飛す一片の雪
百里見秋毫　百里　秋毫見ゆ

高・毛・毫を下平四の豪の韻で踏む仄起式の五言絶句である。いま、この詩の解釈を手許にある三種の本で調べてみた。

A 『李太白詩集(下)』統国訳漢文大成

八月秋の半に於て、辺地は北風高く吹きすぎ、胡地に産する白鷹は、錦毛愈々麗はしく、まことに俊姿颯爽といふべき程である。これを放てば、一片の雪が孤飛するが如く、そして、白鷹は、眼界百里に亘つて、秋毫の末までも見透し、決して獲物を逃がすまいといふ意気込みである。(傍点筆者)

〔余論〕前半は、白鷹その物を写し、後半は、これを放った時を写

し、全首を通じて、その姿態、さながら見るが如くである。

B 『李白(上)』武部利男注 中国詩人選集

八月には国境の風が空高く吹く。えびすの地に産する鷹は、白色で、もようのある毛がうつくしい。これを放つと、ひとり飛びゆき、さながら一片の雪のようだ。百里先まで行つても毛のこまかいところまで見える。

C 『李太白詩歌全解』大野実之助著 早稲田大学出版部

秋の半ば頃八月となって国辺の地方には北風が高く吹き渡って、胡地に産した鷹は白色の錦毛いよいよ鮮明となって美しい。その鷹が一羽で飛び獲物を追う姿はあたかも一片の雪が飛散するように見え、百里の遠いところを飛んでいても秋毫の末まで明瞭に識別できるほどである。

結句の「百里見秋毫」に注目しつつ三者の解釈を比較してみると、Aでは、百里も遠くはなれたところから秋毫を見るのは白鷹である。つまり、この句の文法構造を、「白鷹(主語) 百里見秋毫(目的語)」ととらえている。B・Cでは、百里離れたところから見ているのは作者李白であり、秋毫は白鷹のそれである。すなわち、その文法構造は、「我(李白) 百里見秋毫」という動賓構造になる。因みに「秋毫」の語釈は、A、極めて微細なるものに譬ふ。B、毫は細い毛。動物の毛は秋に殊に細くな

るので、きわめて微細なものを秋毫という。C、秋となって寒さのために極めて細小となった鳥獣の毛のさき。

かつて筆者は「見」字について論考した際、この結句について言及し、次の四つの例解を示した。

イ、百里も遠くへ飛び去った鷹の羽の毛の先までも見える。

ロ、百里先まで飛んでいった鷹そのものが秋毫のように見える。

ハ、山上から眺めると周囲あくまで澄みきって、百里先の秋毫まで見ることができる。

ニ、その胡鷹は百里先にいるどんな小さな動物をも見つけてとびかかるのだ。

イ説はB・Cの解釈である。この場合、「秋毫」を作者が現時点で観ている白鷹の羽の毛先と考えているところに、そもそも筆者の疑問が生じた原因がある。間近でみても定かではないほど微細な羽毛。それをことあるうに百里離れた（たとえそれが数百メートルの距離と仮定しても）、人間の目でみわけられるであろうか。ある人はこれを次のように解釈してみせた。これは白鷹の鮮やかさ純白さを強調する象徴的表現である、と。しかし、それならば、すでに承句転句において十分すぎるほど直接的にまた象徴的に表現しているではないか。胡鷹、白、錦毛、孤飛、片雪。

何かを強調するための象徴表現であるとした場合、もう一つ考えられるのは、作者ないし鷹匠の眼力のたしかさを述べようとしたものとするところである。百里かなたへ飛んでいっても私たちの眼は白鷹の純白の毛の先をみわけられますよ——。（当時、望遠鏡はなかったのかしらという連想が働らくほど珍妙な訳となる。）

以上、イ説の非現実性・観念性を指摘する過程で、しかし、ニ説が想起されてきたのも事実である。眼力のたしかさをいうなら、それこそ「鷹の目」ということこそ正当ではないか。当然、「秋毫」は百里離れる

と極めて微細になるはずの兎や狐あるいは獲物にする鳥など小動物の類ということになる。我われのこの胡地産の鷹は優秀で、どんな遠くにいる獲物も見逃さず、さっととびかかってものにしますよと白鷹の眼力を贅えている句であると解釈するわけである。

結論から先に言えば、前記の拙論の中ではこのニ説を正解として論考を進めたのであるが、実は今回これを撤回し、ハ説に訂正したく思う。撤回すると言っても、イ説、ロ説に比べるとまだまだ捨てがたい解釈とみなしているわけで、今回はよりハ説の妥当性が増したという根拠を二三示すことにしたい。ハ説を支持するに至る思索の経緯および論理を以下順次述べることにする。

イ説の誤解は、まず結句を「百里 秋毫を見る」と訓読し、主語を作（李白）に、目的語を「秋毫」にして、それを白鷹自体の羽毛にみたてたところに生じたものであった。またそれを誘発するもう一つの要因となったのが「見」字の意味のとり方にあると筆者は考えている。すなわち「見」をほとんど「看」と同じ意味で意識し解釈しているところである。その点はニ説の場合も同様である。主語を白鷹にとりかえ、「秋毫」を小動物の意味に解しているところはイ説と表面的に見解を異にしているが、「見」の意味のとり方についていえば両者は同じである。鷹が獲物を見る（発見する）。ところが「見（見）」字は本来そのような強い意志性を持たない語なのである。目を皿のようにしてみたり、眼光鋭く注視するという解釈とは縁遠い語義を持つ漢字なのである。従って、この両者が「看（look）」と変らぬ語釈をされる以上、妥当性が少いと判定されても仕方のないことである。結句は、「百里 秋毫見ゆ」と訓んで、百里四方にわたって秋毫ほどの微細なものまで自然に目に見える（ほど眺望がすばらしい）としなければならない。

今回ハ説に訂正する必要を感じた最大の理由は、杜甫の「山寺」と題する五律詩に同一表現句があり、やはり解釈も同一に揃えておくのがふさわしいと思ったことにある。

野寺残僧少	野寺	残僧 ^{まれ} 少なり、
山園細路高	山園	細路高し。
麝香眠石竹	麝香	は石竹に眠り、
鸚鵡啄金桃	鸚鵡	は金桃に啄む。
乱水通人過	乱水	通る人 ^よ 過ぎり、
懸崖置屋牢	懸崖	屋を置きて牢なり。
上方重閣晚	上方	重閣 ^{くわい} の晩、
百里見秋毫	百里	秋毫見ゆ。

野寺すなわち詩題の山寺は秦州東南の麦積山上にあった瑞応寺という。その寺ではもう残り少なくなった僧侶がそれでも毎日の勤行怠りない。山園には羊腸の小道が高く続き、途中、麝香鹿が石竹のもとに眠り、鸚鵡が金桃を啄む山林風景は一種仙境の風趣がある。幾筋かの水が集まって流れる小さな滝のあたりを、誰か人が通り過ぎて行くのが見えた。懸崖に置かれた家は意外にしっかりとしている。山頂上方の重閣から眺めると、すでに夕暮であるにもかかわらず、百里遠方の秋毫が見透せるほどすばらしい眺めである。

結句の「百里見秋毫」は、山上の方丈に辿りついた作者がおそらくその一角にある重閣から展望したところ、すでに陽は西に傾いていたにもかかわらず、百里四方の微細なものが目に見えるほど眺望がすばらしいと象徴的に表現したものである。夕方の遠大な景観をうたい、壮大かつ清冽な気宇さえただよわせるいかにも杜甫らしい表現形式となっている

といわねばなるまい。ここでは、この句は明らかに「見晴らしのすばらしさ」をうたったものと解する以外にはない。少なくとも鷹の羽毛とは何の関係もないこと論を俟たない。

そこでこの「四方を見渡せばどこまでもどこまでも見晴らしのきく雄大な景観である」という訳（ハ説）を李白の詩にあてはめて概観してみよう。李白はまず起句で「八月 辺風高し」と時期が秋の半ば（十月）頃であること、場所は国境のとある岩山の山上（または中腹か）で、天高く澄みわたる秋空には雲一つなく、かなり強い風が吹きすさんでいる状況を述べている。次にそのような時候・地点・状況を承けて、自分たちの鷹狩用の鷹を紹介する。「胡鷹 白錦毛」鷹の中でもその優秀さを知られる胡地産の鷹は鮮やかな銀白色、錦の模様の羽をしている。その鷹が一たび放たれるとさながら一片の雪の如く天空高く舞い上る。「孤飛す一片の雪」さてあらためて周囲を眺めると、さながら百里遠方の微細なものが目に見えるほど見晴らしのきくすばらしい景観である。

「百里 秋毫見ゆ」

前回ニ説を支持した時は、この結び方がいかにもテーマにそぐわないぎこちないものに感ぜられた。転句まで鷹狩の状況を描写したり鷹そのものの紹介をしたりしてきながら、結句に至って鷹についてはもう我関せずとばかり、腕組みしてまわりの景色にみとれる。テーマにもそぐわないし構成上も疎外感を拭いきれない。その点、李白は鷹狩を観察して、鷹匠の扱うこの胡鷹こそ、期待に違わずどんな遠方にいる獲物もめざとくみつめて襲いかかりますよと誇らしげに表現しているととらえるニ説の方が雰囲気的にもハ説を凌駕する。鷹の視力の鋭さと精悍な動きを目のあたりに見る思いがするではないか。

しかし、残念ながら、ニ説は次の二つの理由によっていわば独断的解釈にすぎないことが判る。一つは、「見」を即「発見」に解することの無理である。「見」が意志性の少ない「見る」という行為である以上、

「注視する」あるいは「察知する」という意志性の強い語に置き換えるわけにはいかない。二つ目の理由は、「觀放白鷹（二首）」と題するこの詩の二首目で、李白は再びこの胡鷹を詠んでいることである。

寒冬十二月

寒冬 十二月

蒼鷹八九毛

蒼鷹 八九毛

寄言燕雀莫相啁

言を寄す燕雀相啁すること莫かれ

自有雲霄万里高

自ら雲霄万里の高き有り

寒い冬の十二月の頃、はじめて捕えられた蒼鷹は八、九本の強い羽のくきを斬り取られ、遠拳颯去することができないようにされる。そこで燕や雀などの小鳥どもに言うておくが、決してこの蒼鷹を口やかましく嘲り笑うようなことをしてはならないぞ。やがて二年三年と経過して鷹狩用の立派な鷹に成長した晩には、自然、大空万里の高さまで飛翔し、あらゆる獲物を捕えて、その勇姿を呈することになるのだから。

表現形式は雜言古詩、毛・高が下平四の豪で押韻している。第一首で鷹狩の様子および周囲の景観をうたった作者は、この第二首でその鷹狩に使用する蒼鷹についてうたっている。莊子の大鵬図南を下敷にした大らかな作品であるが、ともかく、この二首目の補足に注意すれば、先の一首目の結句を強いて胡鷹描写にひきつけて考える必要はおのずとなくなるといえるだろう。以上のべてきたことから、多少の不満は残しつつもハ説を支持せざるを得ない理由が明白になったと思う。

最後に口説についてその当否如何を問われれば、次の詩をもって答えとしよう。杜甫の「孤雁」と題する五言律詩である。

孤雁不飲啄
飛鳴声念群
誰憐一片影
相失万重雲
望尽似猶見
哀多如更聞
野鴉無意緒
鳴噪自紛紛

孤雁 飲啄せず
飛び鳴きて声群を念ふ
誰か憐れむ一片の影
相失なふ万重の雲
望み尽くれども猶は見ゆるに似たり
哀しみ多くして更に聞ゆるが如し
野鴉 意緒なし
鳴噪して自ずから紛紛たり

もともと口説は「正解」を模索する過程で生じたいわば思いつきであった。イ説の、百里彼方に飛び去った鷹の羽の毛の先が肉眼で見ることが不可能とするならば、またたく間に百里も飛び去った鷹自体がスツと細い糸（秋毫）のように見えるという訳の方は、あながち不適切とは言えない。むしろ、そのスピード感といい軽快さといい李白らしさを体現しているときえ言える。文法的にも、「（我）―見―秋毫」という動賓構造として扱えば問題はない、と頭初一人で悦に入っていたものである。ところが喜こんだのも束の間、調べてみるとどうしても「見」を「……の、ように見える」と訳せる例文がみつからない。逆に否定的例として右の詩の五句目のように、「見、える、よう、だ」というのがみつかった。本来「……のようだ」という漢語は、像・似・猶・如・類などであり、「孤飛一片雲」のようにそれらの漢字を使わずに「恰も……のようだ」という意を表わす文章も多々ある。

右の詩、群・雲・聞・紛が上平十二の文の韻。群を離れた孤雁が仲間を求め鳴き渡る。遠くを眺め望んでももう見えるはずもないのに恰もまだ見えるが如く、首をのびし、哀しげに鳴く様子はさながら仲間の呼ぶ声が聞こえるような風情である。（この望・見・聞については後述したい。）要するに「□□見○○」という構文を、□□は（を）○○のよう

に見える（の、ように見る）」と訳すことはまず不可能なことである。

二「見」と「看」および「聞」と「聴」

「見」が意識性の薄い「みる」という行為を表わす語で、語感的には「有」に近いという証拠は次の詩から導き出される。

舍南舍北皆春水 舍南舍北 皆 春水
但見群鷗日日来 但だ見る群鷗の日日来たれるを

杜甫の「客至」と題する七律詩の起連である。二句目の「但見」の割注に「一作有」とあり、ここでは平仄の上でも（仄）、意味の上でも両者を取り換えて差支えないと考えられている。すなわち「見」と「有」の語義が近似するという所以である。但し、文法的に説明する場合、両者は動賓構造と処動構造（存現文形式）という厳然たる区別を持つ。例えば有名な陶淵明の「飲酒（其五）」の次の句において、「見」は限りなく「有」に近いが、「悠然として南山有り」として自己と南山を隔絶する方向ではなく、「悠然として南山見ゆ」としてあくまで自己と南山つまりは自然と微妙な関わり合いを持たせつつ、自然との一体感を表出しようとした陶淵明の意図を汲み取るべきなのである。³⁾

采菊東籬下 菊を采る東籬の下
悠然見南山 悠然として南山見ゆ

自然とのかかわり合いにおいて自己の意識を優位に立たせるのではなく、かといって単なる客観的描写に終らせるものでもない。その不即不離の関係を伝えて見事に読者に会得させるのに、この「見」字において他

にないといえはいい過ぎになるだろうか。自然との一体感に浸りながら、しかし完全に自然の中に埋没してしまうのではない。かすかに自己の存在意識の痕跡をとどめながら「見」字は禅的心境や一種独特の虚脱感を読む者に伝えてくれる。

空山不見人 空山 人見えず
但聞人語響 但だ人語の響くを聞くのみ

有名な王維の「鹿柴」の起承句である。「静」の詩人といわれる通り、全体的に禅的色調の濃い自然との融合を詠んだ作品が多いが、この句においても「人有らず」とつき放してしまうのでもなく、まして「人を看ず」と主意性を持たせて自己存在を主張しようとするのでもない。森蔭に端坐する作者がふと思索をはなれて目をあげても、視界の届く範囲で人影がみあたらない。決して誰か人はいないかとあたりをキョロキョロみわたしているのではない。ただし、人声だけはボソボソとどこからともなく耳にはいつてくる（聞）。これまた何か物音の一つもしないかなと色気を出して耳を傾け聴こうとしているのではない。瞑想に耽りながら自然の中に溶け込んでいる作者の境地が如実に読む者の心にイメージされる。

李白の「黃鶴樓送孟浩然之広陵」の後半二句もそのように読むならば、また一段と作者の茫然自失・無我の境に湧き起る哀切の情を汲み取ることができよう。

孤帆遠影碧空尽 孤帆の遠影碧空に尽き
唯見長江天際流 唯だ見る長江の天際に流るるを

友人孟浩然の乗った帆船がはるかに水平線の彼方に没した。あとに残

された作者はなすすべもなくうつろに揚子江の流れに目をやっている。ただ、その心境は虚脱感を伴いながらも決してなげやりではない。これがもし「ただあとには長江が天のはてまで滔滔と流れて有るだけ」と表現してあれば、読者は作者の気持ちと自然との接点をみきわめられないばかりか、いささか自暴自棄気味の作者の心情を想像するかも知れない。しかしそうではなく、我われは見字のもつ意識性と無意識性の微妙なアヤの中に詩人の感情の襞を探りあて、惜別の情を追体験して永遠の共感を覚えるのである。

「見」字の語義がそのような性格を持つことの一つの証左は、上例でも散見できるように、「見」の修飾語としての副詞に「只」とか「但」「唯」など「ほんの少し、わずかに」の意味の語が使われていることがあげられる。すなわち、修飾語として「大いに」とか「非常に」など誇大表現の語が使われていないのである。「ただちょっと」とか「ほんの少し」という副詞が「見」字の語義の微妙さを規定し物語っているといえよう。

忽見陌頭楊柳色 忽ち見る陌頭 楊柳の色

悔教夫婿覓封侯 悔ゆらくは夫婿をして封侯を覓めしむるを

(王昌齡「閨怨」)

但見淚痕濕 但だ見る涙痕の湿れるを

不知心恨誰 知らず心に誰をか恨むを

(李白「怨情」)

朝日殘鶯伴妾啼 朝日 殘鶯を伴ひて啼き
開簾只見草萋萋 簾を開けば只だ見る草の萋萋たるを

(劉方平「代春怨」)

張明澄氏は、「忽見陌頭楊柳色」を、「ふと、あぜみちの柳の色を見て」と日本語訳し、現代中国白話文では「忽然看見田路上楊柳的顏色」と注釈している。また、「但見淚痕濕」についても、「目につくのは頬に涙のあと」と訳し、「看」は「自主的に見る」であり、「見」は「自然に目に入ること」であると説明している。

さまざまなニュアンスをこめて用いられる「見」であるが、なかでも頻繁に使われるのが、「会う・逢う・遇う」意味としてのそれであろう。

長安一相見 長安 一たび相見れば

呼我謫仙人 我を呼ぶ 謫仙人と

(李白「對酒憶賀監」)

兒童相見不相識 兒童相見るも相識らず

笑問客從何處來 笑ひて問ふ客何處より來たるやと

(賀知章「回鄉偶書」)

岐王宅里尋常見 岐王の宅里 尋常に見

崔九堂前幾度聞 崔九の堂前幾度か聞く

(杜甫「江南逢李龜年」)

若非群玉山頭見 若し群玉山頭にて見るに非ずんば

會向瑤台月下逢 會らず瑤台月下にて逢はん

(李白「清平調詞一」)

有時自發鐘磬響 時有りて自ら発す鐘磬の響
落日更見漁樵人 落日更ごも見る漁樵の人

(杜甫「崔氏東山草堂」)

「相見」の「相」は「互いに」という意味ではなく、要するに動詞「見（逢う）」の相手のあることを示す語である。「見」と「逢」は対語として使われており、杜甫の五律詩「不見」や李白の五律詩「訪戴天山道士不遇」などの例を持ち出すまでもなく、それぞれニュアンスの差はあるものの、これらの詩句での「見」は殆んど「逢・会・遇・遭」などと大きくひとまとめに括って理解していいことがわかる。

「見」はこの外に、ふれる（見風、見光）、みてとれる・あらわれ出る（見効、見長）、見識（一得之見）、わかる、などの語義を内包する。

別離已昨日 別離 己に昨日

因見古人情 因りて古人の情を見る

（杜甫「送遠」）

更に受身の助字として使われたり（信而見疑、忠而被謗）、*xiān* と読んで「見現同じ」き、現象のあることは衆知のことである。

かくして「見」字の語義の守備範囲の広さがわかったが、ここで忘れてならないのは、初めに述べた「見」字を「見る」と訳す場合の語義の特殊性である。そこで、「目が外界の事物に対してある感覚を得ること（眼睛對於外界事物、得到一種感覺）」（『字彙』）と説明される「見」を、「觀察・視・監守」などの語に置きかえて説明される「看」と対比して、より一層その特質を明確にしておきたい。

牀前看月光 牀前 月光を見る

疑是地上霜 疑ふらくは是れ地上の霜かと

舉頭望山月 頭を挙げて山月を望み

低頭思故郷 頭を低れて故郷を思ふ

松尾 善弘（研究紀要 第三十六卷）

朝ぼらけ有明の月と見るまでに、

吉野の里に降れる白雪（『古今集』坂上是則）

坂上是則の「見るまでに」は、明らかに李白「静夜思」では「疑是」にあたる。ひょっとすると地面に降りた霜ではないかと思えるまでに至ったのは、ベッドの前の土間にふりそそぐ月の光を凝視した結果得られた錯覚である。このあと作者は頭をあげて山の端にかかる月を眺めやう（望）、思いを故郷に馳せるのである。ここでもし作者が何の気なしに地上を照らす月光を「見」たのであれば、霜かと見まがう余地も生じなかつた筈である。

今人不見古時月 今人は見ず古時の月

今月曾經照古人 今月曾經て古人を照らせり

古人今人若流水 古人今人流水の若し

共看明月皆如此 共に明月を見るや皆此の如し

（李白「把酒問月」）

君看似花処 君看よや花の似き処

偏在洛陽東 偏へに洛陽の東に在るを

（劉方平「春雪」）

步簷倚杖看牛斗 簷に歩し杖に倚りて牛斗を見る

銀漢遙應接鳳城 銀漢遙かに応に鳳城に接すべし

（杜甫「夜」）

いずれも「注視する・自主的に見る」意である。「看」と「見」が「意識性」という軸で見事に左右対称に置かれる字であることが判る。更に

おもしろいことには、以上の引用語の中にも散見するように、「聞 (hear)」と「聴 (listen)」も音をきくという行為において、同じ「意識性」を軸とする対称語とみなすことができることである。

(目) 看	→	聴 (耳)
見	—	聞
(意識性)		

樹深時見鹿 樹は深くして時に鹿を見
溪午不聞鐘 溪午にして鐘聞こえず

(李白「訪戴天山道士不遇」)

「見」と「聞」が対語として使われ、きれいな対句になっている。右図でいえばそれらは左側の相に属する。前記の王維の「鹿柴」、杜甫の「江南逢李龜年」、「孤雁」など同類である。

竜驚不敢水中臥 竜は驚き敢て水中に臥さず

猿嘯時聞巖下音 猿は嘯きて時に聞く巖下の音

我宿黄山碧溪月 我は宿す黄山碧溪の月

聴之却罷松間琴 之を聴けば却って罷む松間の琴

(李白「夜泊黄山聞殷十四吳吟」)

猿の鳴き声が時に巖下より聞こえてくる。聴こうと思ったら松林の琴の音が絶えてしまった。

次の例は一見「聞」と「看」が同じ相に属して用いられているようであるが、読み解いてゆけばやはり反対の相(右図)であることがわかる。いやそれ以上に、逆相の手を使って達意の効果を狙っていることがわかる。

劍外忽傳收薊北 劍外忽ち伝ふ薊北を收むと
初聞涕淚滿衣裳 初め聞きて涕淚衣裳に滿つ
却看妻子愁何在 妻子を却り看れば愁ひ何に在りや
漫卷詩書喜欲狂 漫りに詩書を卷き喜こび狂はんと欲す
(杜甫「聞官軍收河南河北」)

「聞」を使ったのですんなりいけば「見」とくるわけだが、ここでは逆に「看」を使って思いが裏腹なことを見事に表現している。「却」がその転換を表わす助字であるこというまでもないが、少なからず意表を突かれた思いがするのは筆者ばかりではあるまい。(上図参照)

官軍が薊北地方を収復したと伝え聞き、初め涙で衣裳をしとどに濡らしたものだ。なんと妻子を見守っているうちに愁いなどどこへやら書籍をまとめて素頓狂になって喜こんだ。「聞——見」、「聴——看」を逆に結びつけて「聞——看」めまぐるしい気持の変転を如実に読者に伝えているといえないだろうか。

三 むすびにかえて

数年前、「見」字について考察を進めた際、すでに論理の不備にうすうす気がついていたのであるが、筆の勢いもあって、李白の詩の結句「百里見秋毫」に対しニ説を正解とする論文を書いた。その後「温故知新」よろしく、なお考察を継続した結果、すでにかなり以前に今回訂正の結論に至っていたのである。しかし、なかなか稿を新たにするチャンスをみいだせないまま、その間、靴中に小石を入れたような気分、今日までいわば棚上げしてきた。今度できるだけこの問題にしばって本稿をものしてはみたものの、いささか忸怩たる思いなしとしない。ただ、漢詩の解釈に関しては最近いくつかの発見もあるので、また改めてまとめ

てみようと思っている。

最後に、これも前回書き残しておいた問題の一つ「不見沙場愁殺人」の文法構造に関して若干の考察を加え、補足しておきたい。

辺塞詩人岑参の作品に、「苜蓿烽寄家人」と題する七言絶句がある。仄起式、春・巾・人が上平一一真の韻で押韻する。

苜蓿烽边逢立春

苜蓿烽边 立春に逢ひ

胡蘆河上淚沾巾

胡蘆河上 涙巾を沾ほす

閨中只是空相憶

閨中只だ是れ空しく相憶はん

不見沙場愁殺人

沙場の人を愁殺するを見じ

苜蓿烽のあたりで、ちょうど立春を迎えた。胡蘆河のほとりに立ち、涙は袖をぬらすほど。お前は今ごろ、部屋の中でむなしく私のことを想像してくれているだろうが、砂漠の風物が人を深い憂いに沈ませるありさまは、お前には見えるよしもないことだ。〔唐詩選〕前野直彬注解 岩波文庫)

前記張明澄氏は日本の漢学者たちが漢文読解上、種々誤訳をしていることを指摘し、特にそれが漢詩読誦上に多いと述べている。漢詩読解の際に、具体的事物の点検ミスが目立つとともに、漢文を中国語として正しく認識しない根本原因が尾を引いて、音韻的あるいは文法的誤解が随所にみられるという。とりわけ本稿のテーマである「見」字の解釈に関して、いくつもの誤訳例をとりあげているが、その点筆者も同感であり、常に心にいましておくべきことだと思っている。

そういう中の一例として、張氏は右の詩の結句「不見沙場愁殺人」を次のように論じている。

大方の訳は、妻が主語となり、「沙場愁殺人」という風景が目的語であり、動詞を「不見」においている。(すなわち動賓構造として捉えている——筆者注)つまり、「お前は風景が見えない」といい、どんな風景かというと、「沙漠が人を愁いにおとし入れる」風景である。ところが本当の目的語は風景でなくて人間なのである。この文句のかかりは、「沙場」で「愁殺」した「人」が「不見」という意味で、読み方も「見えず、沙場で愁殺せし人」あるいは、「沙場で愁殺せし人を見じ」と読むべきである。

この文句は前句とかかわりを持っており、前句は、「妻よ、そなたは家にあつて、空しく我を憶うのみ」であるから、むなしく憶うのが(憶う相手)が——筆者注)我という「人」ならば、見えないのも沙場で愁いに沈む「人」なのである。つまり、「お前には、沙場で愁いに沈んでいる人が見えない」、したがって、「ただ閨中でむなしくその人を思うのみ」なのであり、目的語はあくまで人であつて、風景ではない。留守居妻がむなしく思ったり、見たいと思ったりするのは、戦場にいる夫であつて、戦場の風景ではない。

それゆえ正訳は、「お前が部屋で私を思ったとて空しかろう、なぜならば、お前には戦場で愁いに沈む私を見ることができないから(つまり見えない)」というべきである。

いささか引用が長くなつたが、張氏の言い分はこうである。この文句は「不見……人」であり、「沙場愁殺」は「人」に対する説明である。けつして「不見愁場」になり、「愁殺人」が「沙場」を説明するということではない。つまり「不見」は「人」が「不見」であり、「沙場」に「愁殺」された「人」が「不見」なのである。それを諸訳本は、「愁殺人」の「沙場」が「不見」としており、明らかに文章のかかりにおいてまちがいをしていて、というのである。

筆者も基本的に張氏の見解を支持するものであるが、次のいくつかの

点で問題なしとしない。

先ず訓読の仕方について。日本語の訓読はそれなりに古文の文法に則って読み下すという規則があつて、正当且つ正確に訓むという条件のもとで、一応認めておかなければならないと思う。ところで、問題の句を張氏は「沙場で」と読むように提案されているが、古文文法に順うかぎり、それは無理な話で、張氏の説を生かすならば、「沙場に」または「沙場 愁殺せし人」と訓むことになる。しかしながら、問題はどのようにに訓読した途端、文法上ではこの句を処動構造で捉えたということの意味する。一方、「沙場の人を愁殺するを見ず」は明らかに動賓構造で捉えているわけで、張氏もそれを肯定している。すなわち、動賓構造で捉えれば、

〔主語〕 〔動詞〕 〔目的語〕

〔閨人〕	〔不〕	見	〔主語〕	〔動詞〕	〔目的語〕
沙場			沙場	愁殺	人

となり、中国語の基本的文型（S—V—O）の重なった構造として解説できる。処動構造の場合は、

〔主語〕 〔動詞〕 〔目的語〕

〔閨人〕	〔不〕	見	〔場所〕	〔動詞〕	〔主語〕
沙場			沙場	愁殺	人

となつて、動賓構造とのミックスした形として解説するわけである。張氏はこの両者を混同して（解釈は前者、文法すなわちよみは後者）説明しているのだから理解するのに難渋するのだが、初めから文法的に區別して説明すれば混乱はおこらなかった筈である。

「沙場の……」の「の」は、主格の「の」である。従つてこのよみ（即ち文法）に忠実に従つて過不足なく訳出すれば、張氏の誤解を招くこと

はなかつたであらう。——荒寥たる「沙場」がそこにいる「人」（私）を「愁殺」するのであるが、その深い憂愁に沈んでいる「人」（私）をお前（閨人妻）は見るとしてもないのだから——。

筆者はこの句を「沙場の人を愁殺するを見ず」と訓読する方に、つまり動賓構造として把える方に左袒したい。だが、折角そう訓んでも現代日本語訳の方を「この荒涼たる戦場が、人間をかぎりない憂愁におとし入れるさまを目に見はしないのだから」という風に、誤解や誤訳を招く方向に流れるくらいなら、張氏の説（但し「沙場に愁殺せし人を」処動構造）に従い、まちがいない訳をする方を採用したい。

より正確な訳出を期待するという意味で、両者いずれを可としても別に尤めだてされる筋合はないと思うが、しかし、だからと言って問題が消滅したわけではない。動賓構造か処動構造かというレッキとした問題が依然残されている。

年年至日長為客 年年 至日長に客と為り

忽忽窮愁泥殺人 忽忽たる窮愁は人を泥殺す

（杜甫「冬至」）

忽忽たる窮愁（主語）が人（目的語）を泥殺する（動詞）のであるが、ぐたぐたにくじけてしまうのはもちろん人（私）である。

秋瑾女史の、

秋風秋雨愁殺人 秋風秋雨 人を愁殺す

も明らかに秋風秋雨（主語）が人（目的語）を愁殺する（動詞）という動賓構造としてとらえることができる。しかし、この場合も「愁殺」の淵に沈んでいるのは人（自分）であり、いわば文法上の目的語「人」は

意味の上では主語（我）となり「再帰代名詞」的機能を持つ。文法的には他動詞としての「愁殺」も、意味的には自動詞であり（秋風秋雨に接して自分が愁殺する）、これも「再帰動詞」として解釈すれば無事説明がつくようだ。少なくとも「悩殺」や「笑殺」など一連の動詞に目的語「人」がつく形は、一応文法上は動賓構造とみなすが、意味をとる際には再び深層にもどって、隠された主語を取り出さねばならない。そこまですべて周到に用意してかからないとこれまでみてきたような誤訳を引き起す破目に陥るのである。要は漢文を訳出するとき、その文法構造をもしつかり見極めてとりかからないと、思わぬ陥井が待ち受けていることをしつかり肝に銘ずべきなのである。

かくしてまた持論に立ちもどった。我われは漢詩（といわず漢文一般）を読み解いていく場合、とかく漢字という魔術師に躍らされて、安易に字面をなでるだけで了解したと思ひこみがちだが、語義・発音・文法の全面に亘って、つまりは中国語としてきちんと認定して取りかかる姿勢を持つべきなのである。そのような基本姿勢があつてこそ、初めてさまざまな誤解や誤訳を最大限に防止し、限りなく正解に近づくことが保証されるのである。

(注)

- 1 「見」字考——六朝・唐詩の解釈を通して——『加賀博士退官記念中国文史哲学論集』昭54・3 「百里見秋毫」の解釈について『漢文教室』昭55・11
- 2 水路疑霜雪 林棲見羽毛、（杜甫「八月十五夜月」集註「見羽毛、（月光）照林中、棲鳥羽毛皆可見也。」——月が林を照らして棲鳥の羽毛も見えるほどである。
- 3 虚明見纖毫 羽虫亦飛揚（杜甫「夏夜歎」——纖毫が見える（ほど明る）。
- 「悠然」の文法上の働らきについては前注1「見」字考の中で論じた。
- 悠然、遠山暮、独向白雲帰（王維「帰園田作」）

桃花流水窅然去、別有天地非人間（李白「山中問答」）

悠然↓暮、窅然↓去といずれも動詞にかかる副詞とみる。

相看兩不厭、只有敬亭山（李白「独坐敬亭山」）——いつまでながめあつても互いにあきのこないのは、敬亭山よ、お前だけだ。——陶淵明の詩と比較しつつ「看」と「有」の用法の妙味を看取すべき詩である。双方共、主張は自然との一体感にあると思われるが。

張明澄著『間違いだらけの漢文』久保書店

同右『誤訳・愚訳』

紗窓日落漸黄昏、金屋無人見淚痕（劉方平「春怨」）——誰も涙のあとを見る人としていない、とでもなろうか。

『辞海下』二七五五ページ。他に「きく」や「引き会わす」などの意味もある。現代語の「聴見、看見、望不見」などとの出自・関連も今後調査明しなればならない。

『誤訳・愚訳』七三ページ以下。

西湖畔にたてられた記念碑には「秋雨秋風愁殺人」と刻まれているらしい。武田泰淳『秋雨秋風人を愁殺す』七二ページ。音読上あるいは見た目には「秋雨秋風」の方がなじみ易いが、平仄的には「秋雨秋風」の方が規則になつてゐる。（○仄○平○仄○）

そもそも「愁」自体は本来（人）が「愁える」という自動詞であるが、「一殺」とか「一絶」などの程度補語をとりやすく、また使役文の形式に使われやすい。正當今夕断腸処、驪歌愁絶不忍聴（李白「瀟湘行送別」）

総為浮雲能蔽日、長安不見使人愁（李白「登金陵鳳凰台」）

『中国大辞典』二二八ページに、「愁人」の例文として、「愁人莫向愁人说、説向愁人愁殺人（愁人は愁人に語ってはいけない。愁人に語ればよい、よほどく悲しませる）」というのがある。この場合の「人」は単に相手の「愁人」である。つまり本人（主語）に再帰しないからかかる形式の文は動賓構造とみなすのが一番ぴたりしていることがわかる。更につけ加えると、「沙場愁殺人」の場合は、「沙場」が「沙漠の戦場」という場所を表わす語なので、一見、処動構造にとれなくもなさそうだが、その他の例文と見較べると、これもやはり主語ととって（戦場が）、動賓構造に帰属させるのが最も妥当なようである。